

子ども支援と国際化

准教授 鈴木崇之

2012 年に創立 125 周年を迎えた東洋大学は、世界に貢献する「グローバル人財」を養成するために「哲学教育」「キャリア教育」、そして「国際化」を 3 つの柱として打ち出しました。

この 3 本の柱の中でも特に華々しい印象を与える言葉である「国際化」は、私達が学んでいる「子ども支援学」には一見あまり関係がないようにも感じられます。しかし、実はそうではありません。子どもの支援を考える上で、「国際化」は欠く事のできないキーワードと言っても過言ではありません。

私が担当している 3 年、4 年生のゼミ生を例に挙げてみましょう。現在の 4 年生のゼミ生のうち、1 名は 2012 年の夏期休暇期間にカンボジアへ、もう 1 名はベトナムとカンボジアに行き、アジアの子どもの現状を学ぶことができました。また 2013 年の夏には、1 名の 4 年生がカンボジアへ、1 名の 3 年生がベトナムに行っています。

子ども支援の先進国に行くことももちろん良い学びの機会になるでしょう。しかし、私はまだまだ子ども支援が十分に進んでいない地域に行き、「自分達にできることは何か」を考えることを勧めています。このような国際経験は、日本では当たり前に行なわれている子ども支援の重要性を再認識し、それを海外で応用する方法を考えるという深い学びの機会を提供してくれるからです。

2012 年の夏にベトナムとカンボジアに行った学生は、日本ではほとんど見ることができない「物乞い」をする子どもや、学校に通うことができずゴミを拾って生活している子どもの姿を見て、衝撃を受けたそうです。

特に、日本の「こうのとりのゆりかご（赤ちゃんポスト）」のような役割を果たしているベトナムのある寺院を訪問した際には、HIV に母子感染して余命 1 ヶ月と言われている捨て子の子とも出会い、自分の無力さを感じると共に日本の子どもの現状との違いを考えたとのことでした。

子ども支援について学ぶ皆さんには、ぜひ学生のうちにアジアの開発途上国へ行き、子ども支援を相対化して捉えるための複眼的な視点を身に付けて欲しいですし、教員として学生のそのような学びをサポートしていきたいと思っています。

